

## 主 題：祝福と呪いの狭間にあるもの 1

## 聖書箇所：詩篇 93篇

私たちの人生にはいろいろなことが起こります。私たちはそれらの多くのことが私たちにとって重要であると考えます。けれども、私たちがこの地上において今生きて行くに当たって、本当に重要なことというのはそれほど多くはありません。今朝、皆さんと一っしょに考えて行きたいことは、私たちの人生に最も重要であると言えることができるわずかなものの一つであると私が考える「主の主権」です。このメッセージのタイトルを「祝福と呪いの狭間にあるもの」としましたが、それは神の主権こそが私たちの人生において、それが祝福に満ちたものであるのか、それとも呪いに満ちたものであるのかを定めるその狭間に置かれているものであると考えるからです。この神の主権ということは余りにも重要な事柄であるゆえに、聖書は何度も繰り返して私たちに教え続けています。私たちはこのすばらしい神の主権に関することを、詩篇の中でも最もすばらしい詩篇ということが出来る93篇からご一っしょに考えて行きましょう。ここを見て行くに当たって私たちがひとつ覚えておかなければいけないことは、詩篇は書かれた順に並べられているのではないということです。事実、この詩篇150篇ある中で最も古いものはモーセが書いた90篇です。なぜ、このように並べられているのかというと、その多くが様々なトピックにまとめられているからです。この93篇から99篇は「主の主権」に関する大切な教えをまとめてしているのです。93篇から始まって、人間が知らなければならない、人間がよく理解しておかなければいけない非常に大切な事柄を私たちに強調して教えて行こうとしているのです。もし、私たちがこの主の主権を正しく理解することがなければ、私たちの人生は多くの問題、疑問に満ちたものになってしまいます。反対に、もし、私たちが神の主権を正しく理解するならば、私たちがもっている様々な問題、疑問はすべて解決されると言っても過言ではないでしょう。それゆえに、私たちが祝福に満ちた人生を送るのか、それとも呪いに満ちた人生を送るのかという、その間にある、それを大きく左右するものというのが、まさに「神の主権」であると思います。神の主権は余りにも膨大な量の情報を取り扱わなければならない、また、神学をカバーしなければならない、非常に大きなトピックです。それゆえにここですべてのことを見て行くことは不可能なのですが、でも、少なくとも私たちはこの93篇を通して、神の主権がいったいどのようなものなのか、そして、それがいったい私たちにどのような影響をもたらすのか、そのことを見て行きたいと考えます。

この詩篇は大きく三つに区分することができます。

1. 1-2節、私たちが主の主権を正しく理解することができるならば、私たちの問題は消え去る。
2. 3-4節、私たちが神の偉大な力を理解することができるならば、私たちの問題は消え去ります。
3. 5節、私たちが神のみことばをしっかりと受け入れるならば、私たちの問題は消え去ります。

最初に、神の主権、二番目に神の偉大な力、そして、三番目に神のことばということを言いましたが、これらすべては神の主権という大きなトピックの中に収めることができるものであると考えます。今日は、最初の1-2篇を見て行きますが、そのことを考えて行くときに、この短いわずか5節の詩篇の中で著者が、神が私たちに大切なものであると訴える「神の主権」をしっかりと理解することを通して、私たちの人生が祝福に満ちたものとなるように、私たちの人生があらゆる疑問に対する解答を持った人生となるように、ご一っしょにこの箇所を学んで行きましょう。詩篇93篇はこのように記されています。

**93:1 主は、王であられ、みいつをまとめておられます。主はまとめておられます。力を身に帯びておられます。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。**

**93:2 あなたの御座は、いにしえから堅く立ち、あなたは、とこしえからおられます。**

**93:3 主よ。川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。**

**93:4 大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます。**

**93:5 あなたのあかしは、まことに確かです。聖なることがあなたの家にはふさわしいのです。主よ、いつまでも。**

## ☆主の主権

## A. 私たちが主の主権を正しく理解することができるならば、私たちの問題は消え去る 1-2節

## 1. 主の主権とはどのようなものか

93篇で先ず私たちが最初に見るのは、もし、私たちが神の主権を正しく理解するならば、それを認めることができるならば、私たちの問題は消えて行くということです。著者はまず最初に、単純明快でそれであって余りにも重大な宣告をします。神に関する宣言の中で最も重要だと言えることができるような、人間が神に関して語ることができる最もすばらしいことばのひとつであると、そのように表現すること

ができることばを述べているのです。それが神の主権に関することです。私はよく文語訳の聖書を読みますが、文語訳ではこの93篇はこのように始まっています。「主は統べ治めたもう。主はみいつを着たまい、主は力を衣となし帯となしたまい、さればまた世界も堅く立ちて、動かざることなし。」と。「主は統べ治めたもう」とこれこそがまさに、人間が神に関して宣言することができる最もすばらしい宣言ではないかと思えます。もしかすると、皆さんはそれは違うと言われるかもしれませんが、なぜ、神が主権者であることが最もすばらしいと言えるのでしょうか？神が存在されるのが最もすばらしい、神が愛の方であることが最もすばらしいと言われるかもしれませんが、でも、私はそうではないと思えます。神が統べ治めていることを抜きに、神が存在するだけならその神はどんな神でしょう？神がすべてを支配しておられないのにただ存在するだけなら、私たちと余り変わらないではないのでしょうか？確かに、神が存在することはすばらしいです。しかし、存在する神はどんな神ですか？統べ治めたもう神であるゆえに、私たちの神は偉大なのです。確かに、神は愛の神です、他にもたくさんのかを言うことができます。神に関してたくさんのかを宣言できますが、その中でも最も上にあるもの、間違いなくトップスリーに入るもの、それは「神は統べ治めたもう」ということです。神は確かに愛の方です。でも、神がすべてを支配しておられる主権者でなければ、神の愛は全うされるのでしょうか？だれか他の者がやって来て神の愛を断ち切ることもできます。神が主権者でなければ…。神は完全な主権者であるゆえに、偉大なお方であり、すばらしい主であられるのです。この主は王であると新改訳聖書では訳され、文語訳では統べ治めたもうと訳しているこのことばは、神を信じる者には非常に真理です。ここで使われている動詞は名詞から派生した動詞であると言われます。その名詞というのは「王」ということばです。ヘブル語の単語を見ると「王」という名詞と全く同じ単語が使われています。それゆえに、新改訳聖書で訳しているように「主は王である」というその存在を表わす、その特徴を表わす動詞として訳すこともできれば、同時に、文語訳のように「神は統べ治めておられる」という、その王であるゆえの統治を表わすことばとして訳すこともできるのです。私たちには選択があります。新改訳聖書は「王である」という状態を表わすように訳すことを選択し、文語訳は「統べ治める」という神が王であるゆえに何をなさっているのか、そのことを強調して訳すことを選択します。どちらの方を取るのか、少しニュアンスが違って来ます。その答えは、このことばが特に詩篇の中でどのように使われているのかを考えると、はっきりと見えて来ます。主は王である、主は統べ治めると言われているとき、特に、このことばが神を主語として使われているとき、神が王として何を為さっておられるのかという「統治している」ということを強調することばとして使われているのです。確かに、新改訳聖書は一貫して「王である」という訳をしています、私たちはその部分、「王である」をむしろ「統治」ということばをそこに加えながら理解して行かなければいけません。この「神が統べ治めている」、「統治」こそ著者が強調していることなのです。彼は単に「神は王である」という宣言をしていたのではありません。王であるゆえに、神はすべてのものを治めているという宣言をしているのです。

そして、この「統治」というのはイスラエルの国だけに限定されるものではありませんでした。そのことを詩篇の著者ははっきりと私たちに教えます。96：10「**国々の中で言え。主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもって国々の民をさばく。**」、また、97：1「**主は、王だ。地は、こおどりし、多くの島々は喜べ。**」、99：1「**主は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。**」、これらのところで言われていることは、神の統治、神の主権、神の支配は単にイスラエルの国だけに及んでいるのではなく、あらゆる国の中で認められるものであり、そのことを私たちは宣言しなければならぬということを教えているのです。神の支配を逃れる場所はどこにもないのです。それゆえに、I歴代誌16：31にはこのように記されています。「**天は喜び、地は、こおどりせよ。国々の中で言え。主は王である。**」、主は統べ治めたもうと。神は事実、君臨されています。神こそが圧倒的な完全な主権者であられる王なのです。そして、この神はあらゆるものを支配する統治者であられるのです。これがこの詩篇の著者が私たちに冒頭で宣言するすばらしい宣言なのです。神は権威をもたれ、神が造られたあらゆる被造物の上に支配権をもっておられるのです。そして、その権威を事実ふるっておられます。これが私たちの神です。私たちが、神は確かにおられますと言ったとき、また、私たちの神こそ真の神ですと言ったとき、神はご自分の望まれるときにご自分の望むことを行ない、ご自分の望む場所でご自分の人物たちを用いて神の好むことを為さるのだということ宣言しているのです。神は完全な支配者だから。神は名ばかりの王ではないのです。事実、神はこの世界を支配しておられる統治者なのです。けれども、私たちはよく考えなければいけません。

## 2. 神が統治しておられるという真理が神を信じる私たちにどのように重要なのか？

人間にとって神が支配しておられる、神が王であるというこの宣言、真理が、なぜ、そんなに重要なのでしょうか？いったい、どうしてそのことが私たちの問題を解決し、私たちの人生が祝福に満ちたものであるのか、呪いに満ちたものであるのかを分けるその境目に置かれているのでしょうか？そのこ

とをこれからごいっしょに考えて行きましょう。1-2節で神がいったいどのように統治されているのかというその特徴を見て行くことができます。そして、それを通して私たちはこのことが私たちにとってなぜそれほど重要な真理であるのかということをしかり理解して行きたいと思います。神は統べ治めておられると私たちが知るとき、私たちは確かに問題に答えを見つけ出し、この人生に心から祝福を感じて生きて行くことができます。この1-2節を注意深く見て行くと、実は八つの、神がどのように支配しておられるのかというその特徴を見ることができます。そして、その八つを四つずつ二つのグループに分けます。1) 神のもっておられる比類なき統治、2) 神の栄光に満ちた統治

### 1) 神のもっておられる比類なき統治 1 a 節

(1) **排他的な統治**：他のものを加えない、神だけが統治者であるというその統治です。神の統治は排他的であるということは、詩篇の著者が非常にシンプルに発言するこの宣言に見ることができます。「**主は、王であられ、**」、「主は統べ治めたもう」、皆さん、この宣言の中にだれか他の人が入る余地を見ることができますか？だれも入らないのです。私たちはもしかすると、日常生活の中で神が主権者であることを頭の中で分かっているが、実は、神以外のものが私たちの人生を支配することが有り得ると考えていることがあるかもしれません。皆さんは日常的に「運」とか「運命」ということばを使っていますか？こんなことがあって今日は本当にラッキーでした…、それとも神が支配して皆さんにどのようなことが起こるのか定めておられるのですか？事実、私たちの人生は神以外のものによって定められているのではないのです。私たちは神の計画の届かないところで何かが起こっているなどとは考えません。聖書は教えます。主が王である、主が統べ治めておられると。私たちはもしかすると私たちの目に見えない様々な力が働いて私たちの人生を導いていると考えることがあるかもしれません。世の中の多くの人たちはそのように考えます。私たちはもしかすると、私たちの状況が私たちの人生を左右すると思いませんか？もしかすると、私たちは悪魔の支配下にあると考えているかもしれません。確かに、聖書はサタンがこの世の王であると言いますが、この世の王であるサタンも神の支配下にあるのです。確かに、サタンは敵対し、この地上にあって私たちを支配する権利を与えられているかもしれませんが、彼は自分の力でそれをしているのではありません。神がそのことを認めてそのように働いておられるのです。ときに、私たちはこのようなことを聞きます。悪魔が働いて…、悪霊が働いて…あなたたちにこんな不幸が起こったのですと。もし、皆さんがそのようなことを聞かれたらこのように答えてあげてください。それを認めた神がいるからそれが起こったのですと。神は無能ではありません。神の支配が及ばないからそのようなことが起こっているのではありません。私たちの人生は状況に支配されるわけでもないし、私たちの人生は何か目に見ることのない運命や運といったランダムなものに支配されているのではありません。また、私たちの人生は自分自身によって支配しているのでもありません。自分の人生だから何でも自分のしたいようにして構わないでしょう、何がいけないのですか？と言うかもしれませんが、私たちの人生は私たちが支配しているのではないのです。そこが違うから間違うのです。私たちの人生は神が支配しておられるのです。神だけが統治者なのです。私たちがそのことを忘れるとき先のようなことを言います。私の人生だから私が望むことを私は行ない、私が望む時に私のしたいことを行ない、私が望む場所でそれを行ない、私が望むようにすべてのことが起こらなければ私は満足しませんと…。でも、私たちはいろいろなときそうではないという事実気付きます。私たちの望むようにすべてのことは起こらないのです。神だけが唯一の統治者であり、神の統治は排他的なものなのです。パウロはこのように言います。Iテモテ6：15「**その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいます。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、**」と。どうして私たちは神以外に主権者があると考えるのでしょう？どうして私の人生は私のものと考えるのでしょう？神だけが主権者です。

(2) **不断の統治**：絶えることがない永続的な統治です。「主は王であられる、主は統べ治める」とここで使われているヘブル語の文法を見ると、余りにもそれが事実であるという単純な真理しか使われていないのです。つまり、神はいつか統治するようになりましてということでも、これからどこかで統治するようになりましてということでもないのです。神はずっと事実として歴史のどの部分を見ても、永遠のどの部分を見ても、最初から最後まで神は統治しているという事実だけを述べているのです。著者が私たちに伝えている神の主権に関する事実というのは、神が統べ治めることは当然のことである、それが普通のことである、そうでないときはないというのです。ある人はこのように言います、神はこの世を造ったとき、神は時計の製作者のようだ、時計を作ってネジを巻き、その時計をそこにポンと置いて、その後神はその時計が単に時を刻んで行くのを見ているだけだと。そうではありません。神はこの世界を造ってそのまま放っておかれるのではなく、神は造る前から私たちに対して永続して統治者として存在しておられるのです。

(3) **積極的な統治**：神はいつも私たちに関わってくださるのです。主権者としての働きを常に為し続けてくださっているのです。神は積極的に私たちに関わってくださる、何かが起こったからしょうがな

く対応するような神ではないのです。パウロはエペソ 1 : 11 でこのように言っています。「**私たちは彼らにあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。私たちは、みこころによりご計画のままをみな実現される方の目的に従って、このようにあらかじめ定められていたのです。**」と。パウロは救いのことについて話していますが、私たちの人生というのは神がご計画されたその道筋をしっかりとどって行なわれている、神は間違いなく神のご計画、神の目的が達成されるように私たちの人生に積極的に関わっているというのです。だから、パウロはローマ 8 : 28 でこう言ったのです。「**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**」と。神は私たちが生まれる前から私たちの人生すべてを統べ治めておられて、その計画をもって神が行ないたいときに行なわれるのです。神の目的が達成されるためです。救われている皆さん、喜んでください。なぜなら、その計画、その目的には皆さんが神の栄光を完全に現わすことができるように、皆さんの益として神が働いてくださるという約束があるからです。積極的に私たちに統治してくださっている方、この方こそが私たちの支配者であり私たちの王なのです。

**(4) 拒むことができない統治：**神の統治には限界、制限はないのです。神はあらゆるものを治めておられます。主は他のすべてのものを治めているかもしれないけれど、私は治めていませんなどと言うことができないのです。神の統治には制約はないのです。神が統べ治めておられるから、私たちはその神のご計画を、神の為さることを拒むことはできないのです。神の目的を妨げるものは一切ないのです。

このように四つのことを見ました。神の統治は神独特の他に類を見ることのない統治です。確かに、人間の歴史にはたくさんの王が存在しました。たくさんの主権者が生まれました。でも、この神のような主権者はどこにもおられなかったのです。これほど偉大な王を私たちは目にすることはなかったのです。そして、この事実こそ私たちの祝福と呪いとの中に置かれているのです。もし、神が排他的な王であるとするなら、皆さんにはこの神に従う理由があります。もし、神が皆さんに「わたしに従いなさい」というなら、皆さんには神の前に神が求めるあらゆることに従順に生きるという責任があるのです。なぜなら、神が唯一の統治者だからです。

皆さん、このようなことを聞きませんか？または、言いませんか？人間に従うのか神に従うのか、どちらですか？人の決めたルールに従うのか、神のルールに従うのか、神のルールに沿っている限りは人に従いましょう、でも、それが違うようになったら神に従わなければならないと、私たちはよく知っています。皆さんはどれだけそのことを自分の人生に実践していますか？自分の人生に勝手にルールを作っていませんか？神はこう言っているけれど私にはこういうルールがあるのですと。その時点で私たちは主の主権を否定しているのです。神は私にとって排他的な王ではなく、神以外に私という王がいるのだと言っているのです。この状況の中で私は神に従うことができませんと言いました。それなら、その状況が神といっしょに君臨しているのです。どちらが大事ですか？どちらが王ですか？もし、皆さんが神に不従順でみことばに従うことがないなら、皆さんは神をその王座から押し退けているのです。そうすることによって、自分のしたいことを自分のしたいままにするのです。もし、皆さんが神の統治が不断で積極的なものであると認めるなら、皆さんは神に不平を言うことがなくなります、つぶやかなくなります。なぜなら、皆さんがどんな人生の辛いところを通ったとしても、神がそのことを定めてくださって、そのことが神のすばらしい目的を達成するために必要であると神があらかじめ計画してそこに置かれたことを知ることができるから、そこに確信をもつことができるからです。皆さんがいやだと思っているその状況の中で神は神の目的を確かにしておられるのです。積極的に皆さんのためを思って、ご自身の栄光を現わすために、皆さんを苦しみの中に、悲しみの中に、また、喜びの中に楽しみの中に置かれるのです。私たちが神の統治は拒むことができないものであることを知り、この地上において私たちが主の主権から逃れるところはないと知るなら、私たちは神の計画に確信を持つことができます。どこにいても神の計画がなされることを知っており、だれ一人としてそれを拒むことができないことを知っているからです。だから、ここで起こっていることはすべては神が計画された通りのことなのです。もし、私たちがそのことをしっかり理解することができるなら、あらゆることの中であって私たちは神を称えることができます。神に感謝することができます。神の計画を信頼して、神が良い目的をもって歴史の初めから終わりまでを永遠の初めにもうすでに書かれたことを知って、それが全うされることに確信をもつことができるのです。

私たち人間がもつ問題は、神がいるかないか分からないということでも、神がないということでもありません。それは私たちが知っていること、心の奥底でいると分かっている神が主権者であることを認めないことです。だから、私たちは神は神でないというのです。他の神を作ってもいいと言います。アダムが神が主権を侮って以来、私たち人間は神の統治を無視し、自分自身を主権者として来ました。まさに、そこに人の呪いがあったのです。王の王であるこの方はそれゆえに神の主権に従わない者たちを必ず滅ぼすと言われます。けれども、神の恵みのゆえに、私たちはこの究極の王であられる神との間

にキリストのみわざを通して和解をもったのです。そして、その呪いは私たちから取り除かれ、私たちはこの神の主権を正しく認めて生きて行くことができるように、神がしてくださったのです。神の呪いは終わり私たちが主権を見ることによって私たちの祝福が始まるのです。だから、イエスはこのようなことを言われました。ルカ 14 : 26 - 27 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」と。完全な従順、完全な統治者であることに対する認識を神は求めておられます。また、イエスはヨハネ 10 : 27 でこう言われます。「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。」、皆さんはついて行きますか？皆さんはこの方こそが唯一真の神であり主権者であることを認めて、その神の支配に従って生きて行こうとしておられますか？問題はそこなのです。私たちがそれをするときに私たちは決して自分が望むことを自分の望むままに自分の望む時に行なうような人生を歩むことはありません。主権者である神が私の目の前に常におられて私たちの人生を見ておられることが分かっているからです。だから、私たちは神の主権を知ることが大切なのです。私たちが神が排他的で不断で積極的にまた、拒むことができない形で私たちの人生すべてを統治しておられること、世界すべてを統治しておられることを知るなら、私たちはこの神に献身的に神の目的を達成しながら生きて行くことを心から求めて人生を歩むようになります。比類ない統治、そのことを見ました。もうひとつ、神の支配は栄光に満ちたものであると言いました。

## 2) 神の栄光に満ちた統治 1 b - 2 節

(1) 荘厳な統治：著者は言います。「主は、王であられ、みいつをまとしておられます。」と。この「みいつ」と訳されていることばは「高く上げられる」という動詞から派生した名詞です。このことばが特に神に関して使われるときは、神がいかにかすばらしいか、いかにか輝かしい方であるかを語るためです。ヘブル語の辞書を見ると、このことばの説明をこのようにしています。この単語は、神が外に向かって発する、たとえば、栄光の雲であるという、そのような栄光ではなく、神がもっておられる光輝く偉大なすばらしい、他に類を見ることができない力を現わし、その力が贖いのわざを行なうに当たって示される、そのときに使われる表現であると。神がエジプトからイスラエルの民を贖い出したときに、神が偉大な力を示されることによって、神はこの「みいつ」を示されたこと、そのように表現することができるのです。ある一人の旧約聖書の学者はこのように言いました。「この「みいつ」というのは、神の威厳、権威、威光、力を表わしている。この「みいつ」は地上の王たちとは全く違って、主のみいつ、主の主権というのは、単なる威光や力の見せ掛けだけの揭示ではなく、実際の力の現われだ。」と。私たちはいろいろなところで、世の中の支配者たちが自分の力を人々に示そうといろいろなことをするのを見て来ました。軍事パレードが行なわれたり、様々な形でどれほど自分たちが力を持っているのかということを示そうとしました。でも、神の支配、神の力、神のみいつというのは、そのような単なるショーではなく、実際の力を伴ったものであると、そのように言うのです。イザヤ 12 : 5 でこのことばが違う表現で訳されています。「主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。」、「みいつ」と同じことばがここでは「すばらしいこと」ということばで訳されています。このイザヤ書の文脈では救いについて話しているのですが、神は救いを人々に備えることを通して、神が具体的に人間に対して体験できる形でそのすばらしさを現わしているということです。「すばらしいことをされた」、「みいつ」が現わされたこと。神の荘厳さ、神の偉大なる輝き、権威の現われというのは、実際に私たちが具体的な形で体験できるものです。詩篇の 104 : 1 - 4 はこのように語っています。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまとしておられます。:2 あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。:3 水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。:4 風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使とされます。」、何とすばらしい神でしょう！何と偉大な力をもって神のすばらしさが表現されていることでしょう！神の統治は威光に溢れた荘厳な統治なのです。神は「みいつをまとしておられます。」

(2) 力に溢れた統治：そのことが 1 節の後半にこのように記されています。「主はまとしておられます。力を身に帯びておられます。」、主は力をまとい力を身に帯びているのです。先ほどのことと関わりがあります。なぜ、「みいつ」なのか、そこには明らかな力があるからです。それがここで言い表わされているのです。神のみいつは単なるショーではなく実際の力を伴ったものであるゆえに、神はあらゆるものを用いてそのすばらしさを現わしている、その力がここで言われています。この「身に帯びておられ」ということばは、事を行なう準備ができているという意味をもっているとヘブル語の辞書は書いていました。神は何かが起こったとき、何かを起こすためにいつでも力を用いるための準備ができているのです。そうして、その力を現わすことによって、具体的な形で神のすばらしさを私たちの生涯の中に現わしておられるのです。そのことがこのことばによってさらに強調されています。「まことに、世界は堅く建てら

れ、揺らぐことはありません。」と。主権者である王であるゆえに、神はそのすべてを造られた世界を今でも変わることなく堅く建て、それを揺らぐことがないようにしておられます。たとえ、人間が原子爆弾を使って地球を破壊しようとしてもできないのです。神が統べ治めておられて神がこの地を堅く建てられているからです。神は終わりを定めておられます。この地は火によって焼かれると、Ⅱペテロ3：7に記されています。「しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」そのときが来るまで、たとえ地球が温暖化になろうと、どのようになって行こうと、神はこの地を堅く建てられ揺らぐことがないようにしてくださいのです。みことばを見ましょう。詩篇24：1-2「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。：2 まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。」、詩篇119：90-91「あなたの真実は代々に至ります。あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。：91 それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。すべては、あなたのしもべだからです。」。神はこのように力をもっておられるゆえに、神は神の計画が妨げられることがないようにしておられます。神は必ずご自分の計画を全うすることができる力をもっておられます。

(3) 不変な統治：「あなたの御座は、いにしえから堅く立ち、」、永遠から永遠まで変わることがないのです。この「御座」というのは神の主権を現わすものです。「王座」です。そこから神はすべてのものを治めておられる、そのことを示しています。その「王座」が揺らぐことがないのです。「いにしえから堅く立って」いるのです。神は永遠から永遠まで変わることなくその御座に着いておられます。神は不変な方だからその主権も不変なのです。詩篇33：6-12にはこのように書かれています。「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。：7 主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。：8 全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。：9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。：10 主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。：11 主のはかりごととはとしえに立ち、御心の計画は代々に至る。：12 幸いなことよ。主をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。」、この地上のどれほどの賢い人たち、力ある人たちが集まって来て、これが最善であるという計画を立てたとしても、神はそれを見て「いや、わたしの計画のほうが正しい」と言ってご自身の計画を為されるのです。神の御座は不変のものであり、神の統治は永遠に変わることがないのです。

(4) 永遠の統治：「あなたは、としえからおられます。」、永遠の初めから永遠の終わりに至るまで、神は常にすばらしい究極の王としてその御座に君臨し、そこから私たちが従わなければならないことばを発せられるのです。私たちの神のような王はどこにもいません。この方こそ真の王であられ永遠に君臨される方なのです。

私たちの毎日の生活の中で、この栄光に満ちた神の統治はいったいどのような関わりがあるのでしょうか？神の荘厳な統治を認める人は、神の計画が神のすばらしさを現わすものであるのかをよく理解しています。それゆえに、私たちが神を正しい位置に置くときに、私たちは神の語っておられること、行なわれていることがいかに時になつて美しいのかを知ることができます。ソロモンが言いました。「神のなさることは、すべて時になつて美しい。」(伝道者の書：11)と。また、私たちが神のみ力をしっかり理解することができるなら、私たちはどのような状況の中でも神が最善を為さっていることを知って、安心して暮らすことができます。常に最善を為すことができるように、神はみ力を帯に締めて準備ができています。その準備ができていくことが為されると、そこに神のすばらしさが現われるのです。たとえ、それが戦の時であっても平和の時であっても、健やかな時であっても死の時であっても、悲しみの時であっても喜びの時であっても、神は時になつて美しいことを為さっておられるのです。私たちが神の不変さ、永遠さをしっかり分かるなら、私たちはすべての恐れを捨て去ることができます。心配することがなくなるのです。その代わりに私たちは永遠の希望をもつことができ、神の永遠の約束に期待することができるのです。もし、神の比類なき統治が私たちの完全な従順を求めるものなら、神の栄光に満ちた統治を理解することは私たちに完全なる崇拜を求めます。神のすばらしさを私たちが理解するなら、私たちは神の前にひざまずいて礼拝することしかできないのです。Iテモテ1：17「どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」。

ある一人の人物がいました。神の統治、神の主権に関する問題に直面し、そこで大きな葛藤をした人です。その人は確かに祝福と呪いの間にある神の主権、神の統治を目の前にして、そこで大きな葛藤をもちました。彼の名前は皆さんよくご存じの「ヨブ」です。彼が神が主権者であることを確かに理解しそのことに基いて人生を歩もうとしたとき、彼は大きな祝福を得ていました。それは単に肉体的物質的的祝福、人生が順風満帆であったときの祝福だけでなく、苦しみの中であつたときにも与えられていた祝福でした。ヨブは神の主権を理解してこのように言いました。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で

**私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」**（ヨブ 1 : 27）。ヨブは神が比類なき統治者であり栄光ある統治者であることをよく分かっていたのです。そして、その中であって祝福を、心の平安をもちながら生きました。けれども、彼がその神の統治を忘れたときに、神が排他的に不断に積極的に拒むことができない形で統治され、神の統治が荘厳で力あり不変で永遠なものであることを忘れたときに、彼は神の良い計画を疑いました。それを否定しました。なぜでしょう？統治者である神から目をそらしたからです。そして、彼はみじめになり彼の喜びは消え彼の賛美は失われて行きました。ヨブはみじめに挫折し自殺願望をもちそのような悲しみの中に生活したのです。いつまで続いたのでしょうか？神が主権者であることを認めたそのときまでです。ヨブ 38 : 1 - 6 にこのようなことばを見ます。

**38:1 主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。**

**38:2 知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。**

**38:3 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。**

**38:4 わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。**

**38:5 あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。**

**38:6 その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。**

神はこの後 38 - 41 章に至るまでヨブに問いかけ続けるのです。あなたはわたしが創造したときどこにいたのか？だれがこれを支配するのかあなたは答えてみなさい…と、それが終わったときヨブが唯一できたことは、神の前に悔い改めて神を崇めることだけでした。それをしたときヨブには祝福が返されました。ヨブが神が主権者であることを認めたからです。

祝福と呪いの間にあるものは神の主権です。皆さんがもし今日、神が主権者であると認めて生きていなければ、神の主権を知りその主権に従順に従って生きて行こうとしないなら、そして、その主権のすばらしさを理解して神を礼拝し生きて行くことがなければ、皆さんは神の呪いの中にあるでしょう。でも、それを変えることができるのです。神がだれであるのかをしっかりと理解することによって…。皆さんは神を主権者である王として認めておられますか？そのような人生を送っておられますか？ヨブのように、苦しみの中であってその主権を疑うことはありませんか？私たちは言わなければいけません。詩篇の著者と同じように「主は王であられ、主は統べ治めておられます」と。